

田邊雅章

二〇〇八 『はくの家はここにあった―爆心地とロシマの記録―』朝日新聞出版。

山本多喜司／ワツプナー、S

一九九二 『人生移行の発達心理学』北大路書房。

吉本隆明

一九九〇 『定本 言語にとって美とは何か―』角川書店。

Werner, H.

1940(1980) *Comparative psychology of mental development*. International University Press.

Werner, H. and Kaplan, B.

1963(1984) *Symbol Formation: An Organismic-Developmental Approach to Language and Thought*. Psychology Press.

ウイニコット、D

一九七九 『遊ぶことと現実』橋本雅雄訳、岩崎学術出版社。

## 七章 パリと東京のストリートにおける共同性（コモナリテイ）

——アート・音楽・都市菜園によるストリートの流用

モニカ・ザルツブルン（喜田康稔、関根麻正共訳）

### 序 敷居における包摂と排除のプロセスの写し鏡としてのストリート

経済的・空間的排除が進む中で、ストリートとは社会闘争および抵抗の写し鏡であるといえる（詳細は本書の関根論文を参照）。ストリートの人類学は、そうしたプロセス、とりわけ個々人がどのように排除に反応しベンヤミン [Benjamin 1982, 618] のいう意味での私的空間と公的空間の間の「敷居」のような空間を占拠しているかを明らかにするものである。本章では、パリと東京における象徴的で物質的な都市空間における「敷居」という語の用法を発展させ、さらには抵抗という行為によって、共有された状況・条件を意識することで、どのように共同性の認識が創造されるかを明らかにしたい [Salzman 2011b]。

この二〇年間、「コモンス」や「コモナリスト」は、市場や国家とは一線を画した新たな政策を構想しようとする一般的な反資本主義ムーブメントの一つを推進する概念であった [Helfrich and Heinrich-Böhl-Sühng 2012]。世界のどの地域でも、人々はヒエラルキーや富の再分配について問おうとするオルタナティブな生活様式を求めているのである [op. cit., p.15]。このムーブメントはとりわけ都市住民にとって特に重要性を持つといえる。それは（商業目的の使用・

民営化によって、公的空間が減少していること、そして住民たちはどこかに押し込められたり、都市空間における移動や集まる権利をも奪われてきているからである[5]。そこで、抵抗の手段として、創造的なコモンズと仲間同士でつながらプロジェクトが立ち上がってきている。都市菜園[Maier 2011]もこのように都市での生活を自ら確立するためのものの一つである。公的・私的空間を越境する場が、時にアーティストとコラボレーションするかたちで、占拠され、変容され、流用されていくのである。鉄道や高速道路、スーパーマーケットのように人々や商人が顔を向き合わせることなく行き交うAuge[1992]による非場所とは異なり、本章で扱う場所とは住まうことに接続される。一方で非場所との共通点を一つ挙げるとすればその同時性である。密集はしているものの顔の見えない都市空間での人々の出会いというのは、一九九〇年代まではほとんどなかったが、そのような非場所が生まれると同じ時期に、大都市の住民間で社会的つながりを再創造しようという考えが、ボトムアップに出てきたのであった。つまり、この同時期に近隣のつながりを新たに作り直そうといういくつものイニシアティブが働いてきたことが確認されるのである。

以下では都市の自然空間における共通の経験がどのようにに共同性の意識を生むのか検討していく。都市(ストリート)菜園に参加するということは、自給自足を志向するムーブメントに戻る道なのであろうか。議論の嚆矢としてパリと東京のそれぞれの事例を取り上げながら、それぞれの境界域[Turner 1982]におけるパリと東京との間の重要な差異を示すことになる。パリのサント・マルト街と東京都の台東区・谷中の事例との間の共通点とともに、公的空間の収用に抵抗するために公的・私的空間の間の敷居において行為する住民らによって主導されたボトム・アップ型のイニシアティブであったことにある。このように、敷居をまたぐということが出会いのための境界空間となりうる[Turner 1982: 25]。

敷居の経験(Threshold experience)を定義した。ベンヤミン「一九八二(一九八二)」によれば、敷居(Threshold)とは移行的な性質を有するという。つまり、敷居は辺境(Boundary)とも明確に異なるという。「敷居とは一つの域のさまである。変化、移行である……」。敷居とは媒介するなものかを指す用語であろうが、断片的な姿のバサージュ論を残したベンヤミンは、想像を超え混乱を引き起こす行為や出来事が起こりうる境界域として敷居を理解していたのではないだろうか。筆者は、異なった複数の事例に言及しながら、この点について考察を行いたい。まずはパリのサント・マルト街からである。

パリのベルヴィル地区におけるストリート現象の研究によって明らかにされるのは、アートを用いた実践や都市菜園を通じた土地の使用・占拠による共同性の創造がどのようになされてきたかである。ストリート・ウィズダム(グローカルな展開[Sekine 2011])の一場面であると言える。ここでは、労働階級の歴史からすればありふれた遺産の一つが、地区の建造物の保全に資するものとして議論される形で既存の言説空間の中で動員され新たな意味を生み出している。

#### 一 パリのサント・マルト街——破壊の危機、音楽と菜園を通じた抵抗、ジェントリフィケーション

筆者の主たる事例研究は、一九九八年以来の長期に渡る民族誌的フィールドワークの一部をなすものであるが、多様なバックグラウンドからなる住民たちが実践してきた都市の再開発への抵抗に焦点を当てている[Salzman 2011b]。サント・マルトは、筆者が特に着目している街区であるが、ジェントリフィケーションの進行の苦難の只中にある。行政のリーダーシップによるグローバル観光市場での競争力を増大させる努力によって、ジェントリフィケーションはより強く促されてきたのであった。筆者は出来事(an event)ここでは破壊と抵抗の出来事をパリのサント・

マルト街のローカル・ダイナミクスへの起点として精査してきた [Salzman 2007a, 2007b, 2008]。二〇〇一年、各都市間でのグローバル競争が、パリ市において社会主義者であるベルトラン・ドラノエ市長と緑の党からの彼の同盟者の政治的勝利をもたらした。この勝利は、パリの多様性の認識、称揚、市場化という圧力の集大成であった。パリの多様性が強調されるようになったのは、多民族地域における地方選で左派政党が勝利をおさめた一九九五年からである。更に、文化的・地理的多様性をうたう国際的な市場のトレンドがあったため、パリが国際的レクリエーションの中心地として一層宣伝されることとなった。バルベスのファッション・ストリートのようなアートやクラフト工房、またパリ市も支援した二〇〇七年の旧正月の祝祭といった祭典が導入されたことは、先に述べたように多様な文化を強調したことによる産物であるといえるが [Rauin 2009]、その目的は国際観光市場においてパリを位置づけし直すことであった。今日では、*L'official des spectacles* のような観光ガイドや公的文書において、ヒンドゥー教地区とユタヤ人地区と二か所の中華街（その一つはサント・マルトに近い）がお勧めであると紹介されている。一〇年前までは、（逐語的にいえば「ここを訪れることができます」の意の）*“a se visiter”* のようなオルタナティブな観光ガイドや旅行代理店のみが、バルベスやベルヴィルに代表される「エスニック地区」を（地元）旅行者に興味深いスポットであると推奨していただけだった。それが今日では、ジェントリフィケーションが目下進行中なのにもかかわらず、ある種の「絵に描いたような貧困」を目の当たりにすることができる民族混住地域が主流の観光ガイドにも掲載されているのである [Salzman 2011a]。

サント・マルトという名称は、地区内を並行して走る二本のストリートの片方に由来する。現在当該地域にみられる建物の多くは、一八六〇年代に建てられた。ここは元々はパリの郊外 (*“banlieue”*) の一つであったが、コント・ド・マドレ (*“Le Comte de Maistre”*) によってこの街区の建物は造られた。コント・ド・マドレは建築家であり、彼のエリートア思想によって、今日ではマドレ様式 *“le style Maistre”* として知られている。分節的建造物のための設計は、建築家が発案されたのだった。狭い二階から四階建ての住宅は安価な資材で助成金もなしにつくられたものである。工場やアティックが一階部分にあり、上階は衛生環境も劣悪な労働者の生活スペースで、一つあるいは二つに区切られた部屋からなっていた。一連の建物は現在でもなお地図上に目のかたちをとって並んでいる。つまり二つの並行するストリートの間、中間点同士を垂直に一本の狭いストリートがつないでいるのである。一九世紀末には地区全体が私有地となったため、これらのストリートはゲートで閉鎖されることとなった。

一連の建物は、一九八〇年代までにはすでに、その質の低さ故に崩壊の危機にあった。そして一九九一年初頭には、市長が地区全体を更地にしてサント・マルト地域の北部や東部にあるような巨大なビルを建設する意向を示したのである。住民らは強制退去をおそれ様々な戦略を練った。Village Saint Louis *Sainte Marthe* という組織は、大々的にPRを行ってバンケットやフェスティバルを開催し、市民や政治家の支援を勝ち取ろうとした。組織の名称は、巨大都市の中に存在する地域的アイデンティティを示唆している。主催するフェスティバルや活動を展開するにおいては、労働者住宅の建築的・美的価値や地域住民の文化の豊穡性が強く訴えられた。この場の歴史と、住民の共通の敵である右派政治家や不動産投機家との闘争などが、この特定の地域への人々の帰属意識を高められることに寄与した。

一九九四年に修復という考え方がパリの新しい都市プロジェクトにおいて初めて登場した。一九九五年の地方選挙戦において、地元左派のアジェンダには、（地域破壊を引き起こさう）不動産投機への反対と地区の修復支援が第一に掲げられていた。一九九五年には、地域複合体の破壊に抵抗する人々の動員もあって、左派が地元選を制した。その後二〇〇一年には、パリ市全体で初めて左派が多数派となった。ただし修復のプロジェクトが承認されて家屋所有者に支援金が給付されたのは、二〇〇三年になってからのことであった。サント・マルトの事例でとりわけ重要な点は、住民自身によって文化的多様性が称揚されたことであるが、それ

に加えて、このような住民の抵抗がより一旦明示化され周知されるようになると、左派の新市長もその文化的多様性を称揚したということである。今日では、住民の中には、一九六〇年代にやってきた北アフリカ系および旧ユーゴスラビア系移民労働者や、空き家となっていた職人のアトリエを使用している画家やミュージシャンや、その場所の多様性と村のような雰囲気に魅了された中産階級なども含まれている。一九九〇年代よりサント・マルト・スクエアではフェスティバルが開催され、アマチュアあるいはプロの音楽団体、ベリータンサー、道化師などと並んで、地元の人々もステージ・パフォーマンスを通じて文化的バックグラウンドを示しているのである。なお前者の方は、参加している数多くの子どもたちを楽しませるために招かれている。

こうしたイベントは *Les quatre horizons* (四つの地平線) という組織によって開催されている。それはかつての *Village Saint Louis Sainte Marthe* ( ) の組織自体は存続している( ) の内部紛争を経た後、一九九七年に創設された。元の組織名称の "Village" とは共通の地域的アイデンティティを作り上げようとする戦略として組み込まれたものであった。Saint Louis は一六〇七年に開設された同名の病院に由来する。一九世紀までは、それがサント・マルト地区における唯一の建築物であった。今日では "Sainte Marthe" ストリートに隣接しているが、それは元の組織名称の二番目の部分に当たる。この元の組織はこれらの地区の保存を目的に抵抗を行うものであった。次の組織である *Les quatre horizons* の設立者であり会長でもある Kleira はアルジェリア系フランス人の女性で、地区住民(特に若者)を活気づけようとし、様々な地平やバックグラウンドを持つそれぞれの人々をつないできた。また孤立して苦しむアルジェリア人女性のために集まる場を設けるなどしてきた。彼女はサント・マルトで家政婦として働いており、また住居や店舗用地を探している人々のための不動産仲介もしている。それゆえ、本業ではないものの不動産業者としても知られている。サント・マルトで不動産取引に携わっているため、たとえ地域を破壊から守ろうという運動を

ンケットやカーニバル等の公共イベントとともに、スポーツなども含む文化的イベントを開催している。こうしたことによつて、観光客や不動産投資家や地元出身の議員の視野では、サント・マルトがより一層評判の高いものになっていく。また祭礼イベントの組織化は、住民たちのこの地域への同化にも大きな役割を果たしてきた。

*Les quatre horizons* は、いまでは公的資金を受け取っている。一つは、その社会活動に対して都市問題対策大臣から、もう一つは毎年全国各地で開催されている音楽祭 (*Fête de la Musique*) のサント・マルト街での開催にも参画しているため区長から、資金援助を受けている。また会費(会員は四〇人弱)やバンケットの開催やフェスティバルで提供する食事の売上げといったものも資金源になっている。(春祭、年祭、夜の話会などの)年間イベントの企画・開催をする中で、市長や国会議員、他に地元史に関わる組織の長など、様々なキー・パーソンと交流を図っている。他には地元のアーティストや女性職人などもこうしたイベントに参加し利益を得ている。

二〇〇一年、些細な犯罪の発生のため住民から見放されていた、サント・マルト・ストリートの上端に位置する小さいながらも絵に描いたように美しいセントラル・スクエアが、象徴的にもパリを代表するストリートの一つとして指定され、正式に *Place Saint Marthe* と命名された。そのスクエアに立ち並ぶそれぞれの家屋の外観にこのような名称をつけることができたというのは、動員された地域住民にとってはある種の政治的勝利であったといえる。二〇〇五年の(学校の長期休暇の終わりを記念する) *the Fête de la Remise* の開催中に、主催者が地元住民にインタビュウを行いその感想を集計した。その結果は、みな地域住民の間のまとまりを、また地区に存在する立派で希少な建築を肯定的に捉えているというものであった。インタビュウは地域住民に経験されている強い帰属意識を証明したことになる。祭礼イベントの際に、自己肖像の提示としてこのインタビュウの音声を流すと、サント・マルトの住民間でのこの場所に基づいた同化を醸成する手段になったのであった [Salzhann 2011a]。

こうした一連の活動の重要な帰結の一つとして挙げることができるのは、新たに就任した左派市長が、サント・

マルトの文化的・経済的潜在能力を強く認識したことである。その結果、一九九六年に市長自らが「Ensemble, nous sommes le X<sup>e</sup>」(集え、我らパリ一〇番街)という名称の街全体にまたがるフェスティバルを始めた。開催中には地元組織が出し物を行い、(食・音楽・衣装などを通じて)特徴的な文化的アイデンティティを提示した。そして、一部のケースではあるが、結果的にこうした実践を通じて文化的アイデンティティが再発明されることとなった。その後二〇〇四年からは、特定のテーマを掲げて毎年開催されている。

すなわち、ここでは地元の政治機構側が場所に根ざしたアイデンティティの発展に貢献したことになる。区長は「団結・QOL・世界への開示性・市民権」の四つの原則に基づいて活動を行ってきたベートランド・デラノエ市長の綱領に従ってきた。それぞれの地域組織が伝統的な工芸品や食物を展示したり販売したりしたが、こうした文化遺産の提示というものは住民による活動のほんの一面面ではない。こうした集まりやイベントは、地元の楽しみと共にローカルな権力関係の折衝のための機会をも提供したし、グローバル観光市場のなかに新たに地域を位置づけ直すことで、進行中の再開発計画に影響を与えることにもなった。こうしたイベントに参加した政治家たちに対して住民たちは公然とプレッシャーを与え、地域のイメージおよび自らが支持していた都市修復計画の再認を求めたのだ。二〇一四年の選挙戦を制した新市長・アンヌ・イゲルゴは、包括的な都市政治を行いたいとその思いを語っている。「私の描くパリとは次のようなものです。移民は何よりもまずチャンスであると捉えられ、異邦人は地元の一般生活に溶け込む、公共サービスは誰にでも適用され、言語の障壁などは存在しない、そんな都市です。」これまで何人もフランス大統領が同様の演説をしてきたが、実際に多様性を開示するような措置をとったかといえ、限定的であったことも事実である(ただし少ない事例だが、ケ・ブランリ美術館がその良い例であり、「文化同士が対話する」とフランソワ・ミッテランが発案し、ジャック・シラクが完成させた)。

## 二 ストリート現象の重要性

ストリートはアーティストや政治的アクティビスト、あるいは政治的・経済的意思決定から排除された人々の表現の場となっている。公的空間を民営化しようとする押し寄せる波の中で、ストリートの占拠および/あるいは流用がとりわけ意義深い政治現象として浮上している。また最近になって、ストリートは共生の新たなかたちを發明する実験場ともなり、個人化のプロセスや資本主義の消費中心の経済に対してオルタナティブを提供する。筆者は、ストリートが、どの程度に、(都市プランナーによる)排除の場であり、かつ(公的空間で価値や善を共有するという考えを再び導入しようとする活動家たちによる)包摂の場でもあるかということを見ていきたい。

## 三 都市菜園による土地の占拠と流用

ジェントリフィケーションの進行に抵抗する二つ目の戦略は、より多くの公共空間および施設を要求することであった。フランスでは、政治当局は、公の共用のためであれば容易に土地や私有の建物を取得することができる。サンクト・マルトに隣接するシャレー街では、一九九〇年代末にはいくつもの建物が閉鎖されようとしていた。サンクト・マルト二四番街では、巨大な建物が閉鎖されるとパリ市へ売り渡されてしまった。市議会および地区評議会での話し合いでは、住民は自分たちがどのような施設を最も必要としているのかという点について議論を行った。スポーツ施設という者もいれば、若者の出会いの場をつくらうという者もいた。最終的に多数派となったのは、新しく公園をつくらうという意見で

あった。パリのこの地区は特に人口過密で公園もないからである。市の地区評議会も公園という意見を支持し、住民側に建設の選定に加わるよう求めた。その間、空いた建物はアーティストに占拠されていたが、警察はその人たちを追い出した。サント・マルト二二番街のすぐ隣の建物には、ワンルームのアパートがいくつも入った二階建ての家屋があった。一階部にはクロアチア系の地区住民が縫い物のアトリエを有しており、また他のアトリエでは二人の兄弟が木彫に特化して活動していた。安価な住宅がパリには不足していたため、長きに渡ってこの家屋を壊して広い公園をつくるべきか、あるいはそのまま残しておくべきか公的な議論が行われてきた。そして二〇〇五年にはついに、市長の尽力によって住民（トルコ人とその妻、アルジェリア人労働者、アーティスト、クロアチア人テイラーなど）はそこから移住することとなり、将来的により広大な公園を建設するように、オーナーは家屋を没収された。この小さな家屋の隣のサント・マルト一八番街には、鋼板づくりや傘と乳母車の修理を行う業者の入る建物が長期間存在していた。都市中心部から工業を締め出すというヨーロッパにおいて頻繁にみられる政治的な都市計画の傾向が、パリにおいても確認される。また賃料が上昇しているため、多くの起業家は都市部において事業を継続できず、周辺部に移動せねばならないのである。こうしたことを背景に、アトリエや工場は郊外に移っていったのであった。残された建物は、再びアナキスト的あるいは極左のアーティストやミュージシャン、活動家によって占拠されていた。当初は、住民は一致団結して占拠者を保護していた。水や食料を差し入れ、アート・イベントや映画上映、パーベキューやパーティーの際には彼（女）らと一緒にしていた。しかし状況が変わったのは、彼（女）らがますます騒がしくなり、地区住民とゴミや騒音、素行の件などでトラブルが起きるようになってからであった。八月には、その住人のほとんどがパリを不在にしているときを見計らって、警察は彼（女）らを退去させて、建物内部に壁を作り、占拠を終わらせたのである。シャレー一八番街のこの敷地（二六三平方メートル）が市による公園の建設計画に最初に組み込まれた。最終的に、公園拡大の目的で、いくつもの工場ビルが壊されたのであった。そのシャレー

一八番街の建物の隣にあるアパートの入った六階建ての建物は、居住の社会保障対策としてパリ市によって建設されたものであった。シャレー二〇・二二・二四番街のものも合わせると、利用可能な敷地は一〇〇〇平方メートルに達した。当初から地区住民は、新設される公園内に都市菜園のスペースが必要だと訴えていたのであった。

建物が取り壊されて以降の数年間は、公園にあてられる予定であった空間は更地のままであった。土地の区画の中心部にあるアパートの二階建ての家屋が、住民を転居させるのに長時間を要したため、最後まで残っていたのである。この間に公園予定地の空地では、木々は成長し草が生い茂っていった。また残された壁にはストリート・アーティストが日常的にグラフィティを描いていた。



写真1 公的な集合都市庭園に向かって占拠から転換への変化段階にあるパリのシャレー通りの庭園。上の壁に描かれた2つのグラフィティ（落書き）は、ストリートアーティストのトマ・ビュイル（Thoma Vuille）の“Sorry Unesco”と“Le chat”（猫）。（モニカ・ザルツブルン撮影）

二〇〇〇年を回る頃になると、地区住民のあるグループがその更地のスペースを一部占拠し、都市菜園のプロジェクトをスタートさせることにした。その理由の一つは、人々が公園の建設計画のかんりの長期化にしばれを切らしたからである。パリの動きがあまりにも遅いため、自分たちで段取りを進め「荒地地（friche）」を共用の都市菜園に変えてしまおうというのであった。住民はまず花や野菜を育て始めた。野菜や果物の播種というのも自給戦略といえる。都市周辺地域の労働者住宅の庭の中にのみ限られていたヨーロッパの菜園の在り方に、あたかもインドやメキシコのストリート・ウィズダムが回帰してきたかのようである。政治的意見表明というかたちをとった都市中心部での菜園造りは、比較的新しい戦略である（写真1参照）。今日では、パリにおいては、「下から」開設された都市菜園の数は二〇〇以上にのぼる。そして（左派）政

権はこうした菜園を公営化し、余った作物を一つにつきユーロで販売させるなどの支援もしている。サント・マルト街の政治闘争から一〇年近くを経て、公営の菜園がつくられ、地区住民による非公認の「野生の」都市菜園も造られた。後者は、開発計画の進行中に彼(女)らのイニシアティブにもとづいて自覚された再創造されたものであった。従って、このことは不動産投機に抗する地元の勝利であると表現できよう。ただし、都市部の貧困層が本当に貧困層というのではなく都市部の知的エリートではないのか、という疑念は提示しておきたい。

サント・マルトでの春祭り (Fête du printemps) によって、この都市菜園と地区の各イベントの関連性はよく示されている。Les quatre horizons は二、三年ほど花を販売提供し、地区を彩っている。この組織のメンバーにもサント・マルトの都市菜園開設に携わった者がいる。また数年間その菜園を支援していた Les jardins du Chalet (シャレーの菜園) は、Les jardins du coin (すぐそばの菜園) という新たな組織に発展的に二〇一六年四月に取って代わられた。

#### 四 敷居におけるアンダーグラウンド・アート

菜園スペースの上方には、一匹の猫 *le chat* のグラフィティが描かれているが、トマ・ビュイル Thoma Vuille という地元の有名なアンダーグラウンド・アーティストによるものである。その猫は長年の計画期間中に壁の空いた部分に描かれた数多くのグラフィティの一つである。市当局はトマ・ビュイルによる「猫」は保存する意向を示したが、その他は壁を薄茶色に塗って消去した。この出来事は、この地区の抵抗運動が地元政治の主流に取り込まれることの一側面であると解釈されよう(写真2参照)。二〇一四年七月七日に地下鉄駅の建設地にトマ・ビュイルが猫を描いたが、パリ交通公団 (RATP) もまた同じ対応をしようとした。なぜ、公認されていない猫を描く必要があるのかを尋

られると、彼はこう答えた。「この環境の利用者であるのに、どのようにその環境を裝飾しようと考えてはいけぬのですか。自分の描いた猫なんか、地下鉄でいつまでもかけられている敷え切れないような広告と比べれば、全く不快なものではないと思いますか」と。地元出身の国会議員の中には、社会福祉のおかげで一〇年間も生き延びてきたアーティストがその後、地元当局や公的機関と連携し始めたという効果を示して弁護する者も出てきた。トマ・ビュイルのモチベーションは「行政との連携とそこからの逸脱」であったが、今では個人的で孤立的なグラフィティ活動は止めて、「近接の文化としてのアートを共有」しようとしている。その結果として、シャレーの菜園にある壁のグラフィティを、トマ・ビュイルの行政への協力と見なして、当局公認の芸術の内部に取り込んだのである。同様の論理で、都市菜園も市当局の主流政策に組み込まれるのである。ある意味では、私有地と公有地との、行

政公認の計画と住民の創案による占有との間の境界域は、ベンヤミンのいう敷居に相当すると考えられるのである。

#### 五 国際的な政治的ムーブメントの中の コモنزとしての都市菜園

このようにして発生したアナキスト的都市菜園ムーブメントは、地元政治にも有意義な変化をもたらし、住民は一片の共有地を維持できるようになった。こうしたことによって、このローカルな社会的ムーブメントは私的空間を公共空間に変容させ、一九世紀の労働者住宅という建築物の保存という点においても



写真2 公的な集合都市庭園に向かって占拠から転換への変化段階を終え、パリの都市庭園へと収まった状態。「Sorry UNESCO」は消されたが、トマ・ビュイルが描いた猫は保存されていた。この事例は、反行政的意思で始まった占拠実践が、パリ市の公園計画の一部に包摂されてしまう模様を物語っている。(モニカ・ザルツブルン撮影)

成功を収めたのであった。

アーティストによるパフォーマンスの効果を大いに享受したこの政治的勝利は、一つのローカル・シーンにおけるグローバルな政治問題（階級やエコロジー）に対する一つのレスポンスであるとも捉えることができる。携わるアクティビストらは「コモنز」の創出、つまり新たな批判的でグローバルな政治的ムーブメントを目標とする。携わるア次に見るように、東京においては、都市菜園は政治的・社会的に異なった文脈において展開されている。

## 六 東京——トップダウン型とボトムアップ型の都市菜園

日本では、「アーバン・アグリカルチャー (urban agriculture)」のプロジェクトは、都市開発に沿って行われており都市主導であるといえる [Niva 2015]。実際のところは、それは、農村振興に対抗しようというもの（一定の農民にはそれが農村農業に不都合であると思われてはいるが）でもなければ、農村地域に寄り添っているものでもどちらでもない。今日では、アーバン・アグリカルチャーはむしろ補完的な意味合いを持つに至り、こうした補完関係がより可視化されていることを意味する「都市農業 (toshinogyo)」に進展したと考えられる。第二次世界大戦後、経済不況と政治的混乱の中で、非認可のかたちでの作物栽培が始まった。小さな区画の土地が耕作され、それは貸し農園と呼ばれる。というのは、農地法は、農民を保護するため農民にしか耕作する権限を与えていなかったからである。それでも、都市住民は、次の段階では経済的繁栄を背景にして、耕作を続けた。その理由は、過密が進む都市空間において、農業はリラクセスできる余暇となると考えられたからであった。一九七五年より、複数の法によって都市住民の農地の耕作が認められ、二〇〇五年にはついに、市民菜園を許可する改正・特定農地貸付法が施行された。都市菜園は当初コミュニティ・ガーデンとして始まり、そこでは都市住民が一五〜二〇平方メートルの土地を借り

て耕作していた。この市民菜園という形態は、農業の一種に位置づけられる。東京都は、渋谷のような非常に過密な商業地域でも市民菜園が見られるように、東京都は様々なマイクロ・コミュニティ・ガーデンを支援してきた。民間事業者も、たとえば表参道や山手線沿いのようなところに、都市菜園を開設してきている。そしてインターネットで作成の米を販売している有名な女性ポップ歌手・藤田志穂のような人物のおかげで、都市菜園は若者の間でもポピュラーになってきたのである。

こうした自律的実践は、歴史的なボトムアップ型の実践を自治体の行政的利害あるいは商業的利害と関連づける形で行われているが、いずれにせよ、都市菜園に参与する個人々人はこうして切り開かれた空間を物理的にまた象徴的に流用している。顔の見えない都市の中での社会関係を再創造し、古典的なルフェーブルの「都市への権利」と

いう概念 [LeFebvre 1968] を再考させるコモنزの希求を追い求めつつ、現代の都市菜園利用者は商業地・宅地・鉄道の間が存在する都市空間に投資し占拠しているのである。

二〇一〇年と二〇一四年に日本に滞在している間、筆者は東京・谷中地区でフィールドワークを行ったが、都市菜園造りにあたるような自律的実践は至る所で見られた。谷中は、第二次世界大戦でも大地震でも被害を受けていない、仏教寺院が集中している地区でもある。住宅や店舗はたいがい一、二階建ての家屋に入っている。谷中という住宅地にある家屋の前の敷居部分はほとんどが、数々の植物や花、ハーブで覆われている。人々は住宅と公共空間の境界空間にマイクロ・ガーデンを設けているのである。場合によっては玄関と歩道の間は非常に狭い空間なのだが、そのわずかな歩道の一角を都市的



写真3 私的空間と公的空間の敷居での都市園芸。(モニカ・ザルツブルン撮影)





写真4 猫は常に境界を侵犯する。この猫は道に棲んでいるが、私的空間の敷居で食べ物をいつももらっている。(モニカ・ザルツブルン撮影)

マイクロ・ガーデンに変容させている(写真3参照)。住宅の壁から(歩道が低くなって音だけの)蓋もない排水路、そして(段差もなく車道からは白線一本のみで仕切られていることの多い)歩道へと移行する空間は、その区別さえも判然としないように落ち葉で覆われていることもある。地上にこうした空間がない場合は、敷階建ての建物の窓から突きだしたわずかな柵に植物を置くことで代替している。更に、たくさんの猫が住民に餌を与えられており、猫の図像がステッカーやペイントの形で公共空間から私的空間まで広く認められる(写真4参照)。今日では、このような住戸の都市菜園が集中していることによって、谷中には絵のように美しいイメージが強く付与されている(Martin 2008)。住民自身によって創造され享受されているこの詩的で活気のある美しい環境は、より商業的であり行政的である東京の他の地区の、

## 結論

本研究は、公的なあるいは半公的なイベントの観察と都市の敷居や他の境界空間の展開に特に焦点を当てた長期の民族誌的調査を踏まえたものであり、ストリートの人類学の発展につながるものであると考える。パリのサント・マルトの事例では、ストリートにおいて喧伝され実践されたイベントが、対象ワールドへの結節的な入口となり、主要な分析点となった。パリにおいて(資本主義的)排除が進行する中で、都市菜園が都市の発展を促すこと

て現れたが、筆者は東京での問題発見的なフィールドワークにおいてもこの現象につながる都市菜園溢りをいくつかを見出し、観察を行った。都市菜園造りやストリート・アートにおける猫の重要性だけでなく、他の共通点も浮かび上がった。それは、象徴的に物理的に公共空間を共用することの重要性である。すなわち、両都市において、意識的に無意識的に公私の空間の移行領域が住人によって流用され専有されていることである。

比較調査の成果としては、都市行政の(アートや音楽、菜園を通じて)抵抗ムーブメントがいかに主流な政治へと取り込まれていくかも示している。そのようにして、多様性や民族的・社会的混濁やローカルなアート・シーンを国際的に認知された都市資産として市場化するのである。結論としては、アートや菜園がどのように共同性を創出するかと同時に、意識的にか無意識的にか新たな排除の空間の現出も認めたことになる。

ベンヤミンによる敷居の概念は、とりわけこうした抵抗の現象を了解するのに適している。都市菜園は私的・公的空間の境界域において展開される。(入口のような場所として)敷居を移行と都市変化の空間へと変容させるのである。実際的にいえば、極小の都市菜園スペースの出来事であっても、オルタナティブな生活様式を発展させようとしている国際的に展開しているゲリラ菜園あるいはコモンズ希求ムーブメントに連なるものであると考えられる。こうしたムーブメントには、しばしば、共同性を創出するとともに、場への帰属意識を創造することを目的とする音楽や絵画などの芸術的なイベントが伴われている。その意味で、ストリート・ウィズダムは、社会にとってその固定性を揺るがし変身可能なようにする柔軟な潜在力を有していると言える。

## 注

- (1) 特に断らない場合を除けば、筆者の訳出による。  
 (2) Hidalgo, Anne (2014) Paris qui ose. Mon projet pour Paris 2014-2020, p. 173. <http://issuu.com/oseparis/docs/prog-0412-rvb> (3.5.14) Translated by the author.

- (3) ユージウム 名称の公式なサブタイトルは、Musée du Quai Branly là où dialoguent les cultures とされている。http://www.quatranly.fr/en/collections/permanent-collections.html (3.5.14)
- (4) これは "Droit de préemption" (先買権) を通じてのみ可能である。
- (5) Le Monde 29.10.2014, Monika Salzbrunn より。フランス語から翻訳。Salzbrunn: [http://www.lemonde.fr/culture/article/2014/09/05/chat-contre-rip-des-elus-au-secours-du-matou\\_4482977\\_3246.html](http://www.lemonde.fr/culture/article/2014/09/05/chat-contre-rip-des-elus-au-secours-du-matou_4482977_3246.html) (6.9.16)
- (6) エルゴの雑誌。Nora Monnet, Thomas Vuille: L'homme qui donne sa langue au chat, <http://www.artistikrezo.com/art/portraits/thomavuille-lhomme-qui-donne-sa-langue-au-chat.html> (6.9.16)
- (7) ノンラップはブーバン・アグリカルチャー (urban agriculture) から都市農業 (toshinogyo) への変遷を扱った Nelly Niwa の学術論文のサマリーである (参考文献も参照)。

References

- Augé, Marc  
1992 *Non-lieux. Introduction à une anthropologie de la surmodernité*. Paris: Seuil.
- Bauhard, Christine  
2009 'Jardins partagés' in Paris. Urban gardens in the context of sustainable urban planning. in: Doris Gsach, Heidrun Hubenthal, Maria Spithöver (eds.) *Gardens as everyday culture: an international comparison*. Kassel: Universität, Arbeitsberichte des Fachbereichs Architektur Stadtplanung Landschaftsplanung, Heft 169, Heft A 169, pp. 99-106.
- Benjamin, Walter  
1982 *Das Passagen-Werk*, in: id. *Gesammelte Schriften* V.1. Frankfurt/Main: Suhrkamp.
- Hellich, Silke, Heinrich-Böll-Stiftung (Eds.)  
2012 *Commons: Für eine neue Politik jenseits von Markt und Staat*. Bielefeld: transcript.
- Lefebvre, Henry  
1968 *Le droit à la ville*. Paris: Anthropos.
- Martin, Cyrille  
2008 *L'expérience ordinaire: fabriques d'un français de jardin. These soutenue en lettres, langues, sciences humaines et sociales*.

Müller, Christa

- 2007 *Intercultural Gardens. Urban Places for Subsistence Production and Diversity. German Journal of Urban Studies*, Vol. 46(1)
- 2011 *Urban Gardening. Over the Rückkehr der Gärten in die Stadt*. München: oekom.
- 2012 *Practicing Commons in Community Gardens: Urban Gardening as a Corrective for Homo Economicus in Berlin*. David Helfrich, Silke (Editors): *The Wealth of the Commons: A World beyond Market and State*. Amherst.

- Niwa, Nelly  
2015 *De l'agriculture urbaine à la 雑草栽培 toshinogyo: Une analyse de leur émergence dans le cas de Genève et de Tokyo*. Thèse de doctorat. Faculté de Géosciences et de l'environnement, Université de Lausanne.

- Raulin, Anne  
2009 *Minorities urbaines: des mutations conceptuelles en anthropologie. Revue européenne des migrations internationales*, 25, 3, pp. 33-51.

- Salzbrunn, Monika  
2007a *Lokale und Globale Produktion von Identitäten im Rahmen von Ereignissen – Wie ein heterogenes Pariser Stadtviertel seine Identität konstruiert*, in E. Tschernokosheva and V. Gransow (eds.), *Beziehungsgeschichten: Minderheiten – Mehrheiten in europäischer*

- 2007b *Perspektive*. Bautzen: Domovina, pp. 151-168

- 2007c *Enjeux de construction des rôles communautaires dans l'espace urbain: le cas du quartier de Belleville à Paris*, in J. Laville, I. Sainsaulieu and M. Salzbrunn (eds.), *Esprit critique*. Automne 10 (1), [<http://www.espritcritique.fr/publications/1001/esp1001article02.pdf>]

- 2008 *The Feast as Marginal Politics: Carnival as a Mode of Expression in Migration*, in A. Hearn and K.-P. Köpping (eds.), *Rituals in an Unstable World: Contingency – Hybridity – Embodiment*. Frankfurt/Berlin/Bern/Bruxelles/New York/Oxford/Wien: Peter Lang, pp. 151-170.

- 2011a *Rescaling Processes in Two Cities: How Migrants are Incorporated in Urban Settings Through Political and Cultural Events*, in Nina Glöck Schüller and Ayşe Çağlar (eds.), *Locating Migration. Rescaling Cities and Migrants*. Ithaca: Cornell University Press, pp. 166-189.

- 2011b *Multiple belonging in urban neighborhoods*, in: Salzbrunn, Monika, Yasunasa Sekine: *From community to commonality: Street phenomena in an era of reflexive modernisation*. Tokyo: Seijo University Press, pp. 45-80.

- Salzbrunn, Monika and Yasunasa Sekine

- 2011 *From community to commonality: Street phenomena in an era of reflexive modernisation*. Tokyo: Seijo University.  
Sekine, Yasunasa  
2006 Anthropology Research on Transnationalism and Street Phenomena. Research Objectives [http://www.transnationalstreet.jp/en/outline/assignment/26.2.2010].  
Turner, Victor  
1982 *From Ritual to Theatre: The Human Seriousness of Play*. New York City: Performing Arts Journal Publications.

## 八章 野菜とひとが紡ぐローカリティ

——「伝統野菜のエスノグラフィ」のためのメモランダム

鈴木晋介

はじめに

「伝統野菜」というラベルを用いて、地域に埋もれた在来の作物を再発見・再評価し積極的にプロデュースしていく動きが全国的な拡がりを見せている。本論ではこれを「伝統野菜ムーブメント」と呼ぶ。こうした身近な在来作物を地域固有の食文化として取り上げ直し、地域振興へとつなげていこうとする試みが拡がる一方で、いわゆる「ファスト風土化」[三浦二〇〇四]として表象される地域の固有性の平準化作用も増々進度を速め、その範囲を拡大しているように実感されることも事実であろう。私たちの暮らしの場には、ローカリティをめぐる錯綜したせめぎ合いの図式が重なっている [3 Sekine 2001]。

「伝統野菜ムーブメント」をテーマに設定する筆者の問題意識、あるいは大きな課題は、その同時代的意義を問うことにある。なぜ今伝統野菜なのか、その意義は何かである。そしてこれを問うためには、生活の場における「ひとと野菜が生きるカタチ」をめぐる記述・考察、いわば「伝統野菜のエスノグラフィ」が不可欠であると筆者は考えている（その理路は第二節に論じる）。本稿はその試みの一歩としてのメモランダムである。

# ストリート人類学

方法と理論の実践的展開

関根康正 編

風響社

編者紹介

関根康正 (せきね やすまさ)
1949年、群馬県生まれ。
1993年、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院博士課程修了。Ph.D(Social Anthropology)。
専攻は、社会人類学、南アジア社会研究。
現在、関西学院大学社会学部教授。
主著書として、『社会苦に挑む南アジアの仏教：B. R. アンベードカルと佐々井秀嶺による不可触民解放闘争』（関西学院大学出版会、2016年、共著）、“From Community to Commonality: Multiple Belonging and Street Phenomena in the Era of Reflexive Modernization” (Center for Glocal Studies Seijo University, 2011年、共著)、“Pollution, Untouchability and Harijans : A South Indian Ethnography” (Rawat Publications , 2011年)、『ストリートの人類学 上巻+下巻』（国立民族学博物館、2009年、編著）、『宗教紛争と差別の人類学』（世界思想社、2006年）、『〈都市的なもの〉の現在：文化人類学的考察』（東京大学出版会、2004年、編著）、『ケガレの人類学：南インド・ハリジャンの生活世界』（東京大学出版会、1995年）、論文として、‘Transnationality, Hope and ‘Recombinant Locality’: Knowledge as Capital and Resource’ (South Asia Research 32(1), 2012年) など。

ストリート人類学 方法と理論の実践的展開

2018年2月20日 印刷
2018年2月28日 発行

編者 関根康正

発行者 石井 雅

発行者 株式会社 風響社

東京都北区田端 4-14-9 (〒114-0014)
Tel 03(3828)9249 振替 00110-0-553554
印刷 モリモト印刷

執筆者紹介 (掲載順)

トム・ギル (Thomas Paramor Gill, 一般に Tom Gill)
1960年、イギリス・ポーツマス生まれ。
1997年、ロンドン大学政治経済学院社会人類学研究科博士課程修了。Ph.D(Social Anthropology)。
専攻は、社会人類学、日本研究。
現在、明治学院大学国際学部教授。
主著書として、『Men of Uncertainty: The Social Organization of Japanese Day Laborers in Contemporary Japan』(SUNY Press, 2001年)、『毎日あほうだんす：寿町の日雇い哲学者西川紀光の世界』（キョウトット出版、2013年）、『東日本大震災の人類学：津波、原発事故と被災者たちの「その後」』（人文書院、2013年、編著・共著）、『Yokohama Street Life: The Precarious Career of a Japanese Day Laborer』(Lexington Books, 2015年)。論文として、『日本の都市路上に散った男らしさ：ホームレス男にとっての自立の意味』（『日本人の「男らしさ」：サムライからオタクまで「男性性」の変遷を追う）、サビーネ・フリューシュトゥックとアン・ウォルソール編、第6章、175-202頁（明石書店、2013年）他。

飯嶋秀治 (いじま しゅうじ)

1969年、埼玉県生まれ。
2005年、九州大学大学院人間環境学研究院博士課程修了。博士（人間環境学）。
専攻は、共生社会システム論。
現在、九州大学大学院人間環境学研究院准教授。
主著書として、『アクション別フィールドワーク入門』（世界思想社、2008年、共著）、『支援のフィールドワーク：開発と福祉の現場から』（世界思想社、2011年、共編著）、『社会的包摂／排除の人類学：開発、難民、福祉』（昭和堂、2014年、共著）、『現実介入しつつつこころに関わる展開編：多面的援助アプローチの実践』（明石書店、2016年、共著）、論文として、『社会的排除とのつきあい方：日本の児童養護施設における臨床心理学と文化人類学の連携』（『文化人類学』77巻2号、2012年）。

田嶋誠一 (たじま せいいち)

1951年、福岡県生まれ。
1980年3月 九州大学教育学部大学院前期博士課程（教育心理学専攻）博士課程単位取得退学。博士（教育心理学）。2016年3月に九州大学を定年退職。九州大学名誉教授。
専攻は、臨床心理学。
主著書として、『現実介入しつつつこころに関わる：展開編』（2016年編著、金剛出版）、『その場で関わる心理臨床：多面的体験支援アプローチ』（2016年単著遠見書房）、『心の営みとしての病むこと：

イメージの心理臨床』（2011年単著、岩波書店）、『児童福祉施設における暴力問題の理解と対応：続・現実介入しつつつこころに関わる』（2011年単著、金剛出版）、『現実介入しつつつこころに関わる』（2009年、金剛出版）、『不登校：ネットワークを生かした多面的援助の実践』（2010年編著、金剛出版）など。

根本 達 (ねもと たつし)

1975年、ペルー生まれ。
2010年、筑波大学大学院博士課程人文社会科学部研究科修了。博士（国際政治経済学）。
専攻は、文化人類学、南アジア地域研究。
現在、筑波大学人文社会学系助教。
主な論文として、『ポスト・アンベードカルの時代における自己尊敬の獲得と他者の声：インド・ナーグプル市の反差別運動と仏教僧侶佐々井の矛盾する実践について』（『文化人類学』81巻2号、2016年）、『「繋ぐ者」の連帯と開かれた交渉の場：現代インドを生きる仏教徒たちの改宗運動と生活世界』（『文化人類学』78巻3号、2013年）など。

近森高明 (ちかもり たかあき)

1974年、愛媛県生まれ。
2002年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）。
専攻は、文化社会学、都市空間論。
現在、慶應義塾大学文学部教授。
主著書として、『ベンヤミンの迷宮都市：都市のモダニティと陶酔経験』（世界思想社、2007年）、『無印都市の社会学：どこにでもある日常空間をフィールドワークする』（法律文化社、2013年、共編）、『都市のリアル』（有斐閣、2013年、共編）、論文として、『コールハース、ズーキン、そしてベンヤミン：都市批評の現在の困難を超えて』（『法学研究』第90巻第1号、2017年）、『「地下街主義」宣言のためのノート：高度経済成長期日本の過密の文化』（『文化人類学』第82巻第2号、2017年）など。

南 博文 (みなみ ひろふみ)

1957年、広島県生まれ。
1985年、米国クラーク大学大学院心理学博士課程修了。Ph.D(Psychology)。
専攻は、環境心理学、都市の場所研究。
現在、九州大学大学院人間環境学研究院教授。
主著書として、『子ども達の「居場所」と対人的世界の現在』（九州大学出版会、2003年、編著）、『環境心理学の新しいかたち』（誠信書房、2006年、編著）、『社会と場所の経験（質的心理学講座第3巻）』（東京大学出版会、2008年、編著）、論文として、